

社会学の立場から

川村俊蔵

1. 霊長類学及び他分野との関係

社会学の立場なるものを論じる以前に、霊長類学とは何かという問いに対して見解を述べる必要がある。それは対象学ではないかという一種さげすんだ意見に対し、まさしく明瞭にそうだと答えるべきである。人類をふくめた霊長類が、歴史的事実としてとらえつくされたとき、霊長類学の使命は終る。そこには普通の学としての理論・通則のようなものは生れてこない。しかしながらわれわれは霊長類とはどういうものか知らなければならぬのだ。このことの意味がわからない人は、私から見れば学問を十分に理解していないと思われる。演繹可能な理論・通則の発見のみが科学ではなく、それのみにとられることは学問の使命を不完全に狭隘にしか考えていないのである。

ここで歴史的事実と述べたのは深い意味がある。無機世界にも歴史はあろうが、生物的世界は約10億年の歴史をもち、全体としては一過性のものである。たとい他の天体に生物的なものがあつたとしても、この地球上の生物の歴史とは違った展開を見せるであろう。中南米の絶滅有蹄類やオーストラリアの有袋類が示すように、互いに隔離された二地域における進化が、往々にして相似を生むことはある。しかし全体として決して相同ではなく、それぞれが歴史的過程を異にしている。

このような生物史観は、明らかに通則を越えるものであり、生物学者の脳裏に深く叩き込まれているべきものであるのに、しばしば閑却されている。生物的事実が歴史的事実であることを捉えることなしに生物学はもともと成立しないのである。

ここにのべた生物史観からの脱離は、生物学の実験室化とともに進んだ。進化学者や野外研究者は、統計学に走りすぎた魚類生態学者などを除くと、一般に生物史観のなかで考えてきた。そのよき例は今西錦司の「生物の世界」であろう。

野外研究者のなかに含まれる動物社会学者も、動物を歴史的事実の総体として認識する基本的立体的から離れたことはなく、従って多くの実験科学者とちがって、かりに社会的現象を視野の中心にとらえていても、その周辺は大きく拡がり、周辺部と中心部との境も常に不分明であつたといえよう。このことが分野として独立した科学になることを妨げるというよりは、むしろ独立してはいけないという制止として働いてきたともいえる。これまでの最大の動物社会学者と称してよいであろう Wheeler の場合にも、彼は系統分類学者として一家をなすと同時に、形態と機能を視野におく人であり、見方によっては行動学者であり、栄養交換を論じる生理学者でもあつ

た。そしてその結果は昆虫社会の進化という問題に凝集して行つたのである。この学派の研究には昆虫における神経系の発達とその機能の問題も含まれ、その一人である岩田久二雄が、卵巣の問題をとりあげたのも、まことに自然である。ここにおいて言葉尻をとらえて、動物社会に進化があるかといった問いを發するのは、ナンセンスなものというべきである。

霊長類社会の研究も、もともとこのような場で行なわれるべきものであり、その外延は霊長類研究所そのものといつてよいくらいである。霊長類は昆虫に比し、より高度に複雑な有機体というべきであろうが、昆虫の研究者がみずから引きうけねばならなかつた多面性は、この場合にはそれぞれの専門分野の研究者により、さらに精緻で徹底した追求がなされる状況にある。社会学研究者は野外の複雑で統合的な社会現象そのものにかかり集中でき、そこで発見される問題の個々のメカニズムは、それぞれの専門家に委ねて解決してもらふ立場にある。しかし現実にはそうかんたんに運びそうにない。

まず実験系の諸分野は、それぞれ過去の成果とその途上開発された方法を基礎に、独自の理論・見解をもつとともに、自ら得意不得意がある。だからいきなり野外の問題をもちこんでも、要素的に複雑すぎて実験の方途が見出せなかつたり、もともとその方面には学問的な用意がなかつたりする。すでに述べたように、さらに野外で常に見られるような生物史観を含んだいわゆる biological problems に対し、正面から対決してゆく姿勢がなく、難物として敬遠する風潮が、分野によって異なるであろうが、これまでなかつたとはいえない。一方学問には迂回的に作用する面があり、一見無関係あるいは単に技術論的と思われるものが、意外な発展をもたらす例は少なくない。だから常に biological problems に密着することを望むことには問題がある。けれども迂回性に信頼をおきすぎると、回帰性をもたない研究になってしまうおそれもある。研究者が常に悩む大きな問題がここにあり、その苦しみのなかでたい基本的な学問の線をかきとり出すかが、研究者としての鼎の軽重を問われるところである。すぐれた研究者が生れてくる培地として、一方では biological problems のしっかりした認識と、一方では迂回作用をみとめるひろい余裕とが必要である。

このなかで霊長類の社会の研究者は、常に清新な biological problems を、できるだけ深い洞察を伴つた形で提供するとともに、それに対する共同研究の可能性を、他分野の研究者の協力のもとにさぐり求め、なお多くの点では、自らの手で、すくなくとも荒ごなしの研究を行なう必要がある。

2. 社会性の進化

前節で述べたように、霊長類社会の研究は霊長類学を包摂するほどの大きな視野に立つものである。それは社会というものが、種内の構造として、もっとも総合的な質性をもつものであるとともに、霊長類進化上の問題として扱うにも、もっとも包括的な存在であるからである。

社会現象には、かんたんに分けると、非常に変化しにくい動かない部分と、その場その場でも変わるような変化性の部分とがある。事は必ずしもかように単純ではないが、動かない方から述べると、その好例としてトリの営巣育雛の場合のツガイ（番い）現象が挙げられる。トリは卵性であるとともに恒温動物である。卵や雛は他動物にねらわれやすい。このような条件下では、メスが単独で巣をつくり、卵が冷えて死なないように抱卵し、かえった雛に給餌し、それらを外敵から守り、且つ自己の食糧も確保するということはまず不可能である。ここで見られるもっとも普遍的で安定した社会型は、オス、メスの協力としてのツガイである。

ところでトリのおかれた条件で種族維持を行なう方法は、可能性としてはツガイだけとはいえない。卵を他の種の巣に生みつけるホトトギスは、他の種によりかかる寄生性だが、*Crotophaginae* では群れが共有巣をもち、集団でこのしごとをカバーする。しかしこれらとて、ツガイ型が原型で、それから派生したことはほぼまちがいない。

このようにある種の社会現象は、かなり大きな分類群をカバーする系統的特性といえる。それは形態的にも生理的にも深い根拠をもつが故に変化しにくいものと考えられる。

トリといった目に特徴づけられる大きな不動性の他に、属や種に特徴づけられる不動性は枚挙にいとまない。たとえばトリの場合、ツガイ形成やナワバリ防衛などのさいのさまざまなサイン、ツガイ形成の期間、オスとメスの労働比重などは、属や種によって異なっていて、それなりに不動性、つまり本能とか生得とかいわれる種族的特性になっている。そのなかには、ジャノメチヨウの羽のリング模様や、クジャクの尾や、カモメのクチバシの斑点などのように、はっきりと形態的特徴をともなうものもあるが、多くの場合、種として系統として固定しているメカニズムは不明のままである。

このような動きにくい、本能としての社会現象を、もっともエネルギーに包括的に研究したのが、さききのべた Wheeler, 岩田, 坂上昭一らの昆中学者であった。かれらは一般にほとんど単独生活者といえる昆虫のなかから、甲虫目、膜翅目、等翅目などに属する多くの系統（ほぼ科単位）で、それぞれ独立にいわゆる家族性（超個体性 *superorganism*）に向けての展開がおこるさまを、克明に追跡し、進化の上での巨大な収斂現象を

描き出したものであった。

もちろんここに問題がないわけではない。行動や社会の化石が、きわめてまれにしか残らない（たとえばバルト琥珀の中に、とじこめられたアリのキャスト分化が明瞭に示される）が故に、進化のあとづけは系統分類にもとづく現存種の比較研究によって支えられている。その系統分類がゆれうごく場合が多いし、たとえば等翅目のように、その進化のプロセスを明示する原始的な種が絶滅しきっている場合、どうしようもないことがおこる。昆虫学者の苦勞の一つは、こういったミッシングリンクを求めての熱帯での放浪であった。また何故にこの種は原始性にとどまったのか、またたとえば貯食行動の獲得といった進化の重要な起爆材となったメカニズムが、部分的にわかってくるにしても、なお全体をカバーする説明にならない等、多くの問題が残されている。

それにもかかわらず、全体としてマクロに感じとれる昆虫の社会性の進化の方向とその意義については、昆虫学者の述べるとおりであり、おそらく今後において大幅に覆ることはないであろう。それとともに、比較社会学に対する強いはげましもなっている。

ここで霊長類社会の研究者は、この昆虫やその他の無せきつい動物、ケモノ、トリ、サカナなどの社会を、常にひろく頭に収めつつ、霊長類社会の進化史を考えてゆかねばならない。そこでもっとも緊急なのは、系統分類学者との協力であるが、生態学者、進化学者とも一丸となった垣塙のなかで、互いに影響しつつ発展させる必要がある。昆虫に比し種数は少ないが、霊長類は進化の諸段階を暗示するような原始的な種が、比較的良好に保存された群である。かつて筆者は一応の頭の整理として、霊長類社会の進化に関する一文を草したが、まだこれは大いに揺れそうである。

3. 社会構造および社会行動の研究

形態的に静的に見れば、社会は構造であるが、機能的に動的に見れば、社会は個々の構成員の行動から成っている。そこに過去の行動の蓄積によって生まれた構造もあり、社会の研究者はふつうこの形態・機能を一丸としたダイナミックな考えかたに立っている。構造はかなり社会学独自のものかもしれないが、行動ははっきり行動学、つまり心理学と関係をもつ。そして心理学とて本来構造を欠落させた形で研究する学問ではないであろう。social behavior ということば、ときには communication ということばで、社会現象を代表させるのは、前節で述べた動きにくい部分を包摂するのに、多くの問題を生じるであろうが、ここでとりあげる動きやすい部分については、構造・機能の関連を前提として包むかぎり、社会との同義語と考えてよい。もし同義語でないとりあげかたをするならば、学問として著しく片偏なものであろう。

さてこの社会の動きやすい部分は、とくに中枢神経系、なかでも新皮質系の関与によって生じる面が大きい。動きにくさの場合、そこに固定の度合の差とそれぞれを支えるメカニズムがあったように、動きやすさの場合にも、当然度合やそのメカニズムがある。この点で神経生理学による中枢神経系の構造的且つ機能的な研究は、社会の研究者にも大きな拠り所を与えるものである。そればかりでなく、食物の所在や、外敵の布置といった比較的かんたんなものをふくめ、生態的要因の関与は当然であり、そのほか形態・生理的条件をふくめ、有機体そのものの複雑な構造・機能が、第1節にのべたように社会を成り立たせているし、関連諸分野との協力とともに、社会研究者の独自の働きを必要としている。

ここでこれまでの霊長類社会の研究のサンマリーをする余裕はないが、以上にのべた基本線からして、いくつかの留意点を掲げてみよう。まず第一に社会現象を構造的機能的に、ダイナミクスを入れたモデルとして理解してゆくことが必要である。モデルといえばニホンザルの群れを同心円であらわした例もあるが、少数の現象例から現象的に描いたこのモデルは、初期には整理に役立っても、早晚塗りかえられ、より深い理解に立つモデルに切りかえられるべきである。しかしなおこういう展開の出発点として、それはそれなりに役立ったのである。モデル化はこまかい点まで網羅的に表現できるはずがなく、いわば骨子であり、また必ずしも図示できるものでもない。

第二の留意点は社会現象が、動きやすい部分においても歴史的経過である点である。ひとつの社会行動の発現が、その時かぎりの刺激や場の構造の函数としてのみとらえられることはまちがっている。限られた部分の測定ばかり厳重にするのも、要素が複雑でわかりやすい野外を中心とする社会の場では、結局他のあいまいさに打ち消されるのであるが、時間軸にそって流れる要素の複雑さから、さらに問題は難しくなる。ここで基本になるのは、やはり素朴なゼネラルオブザベーションを長くつづけることであり、マクロな問題はしばしば観察を通じて浮び上がってきて、時には見事な証明を得ることすらある。この観察をつづけながら、それを基礎としながらそのなかの特殊問題とその解きかた、テスト法や記録法や分析法を考え出してゆくほかない。この特殊問題に突っこむさいにも、ゼネラルオブザベーションを欠くことが、非常に危険な状態を招くことになる。一見馬鹿げた遅々とした方法に見えても、社会研究の基礎はやはり長期観察である。この結果どれだけのものがえられるかには、資質の問題もあるが、個々の観察の精度を高める真剣さが、もっとも必要である。

第三の留意点として、かかる長期観察によってえられ

る現象記載の大部分は、すくなくともその記録の時点においては意味不明のまま過ぎてしまう。ここにおいてもしこれがこのような意味内包をもつということが察せられたとき、この洞察についても記録し、あとに残すべきである。そしてそのなかで重要と思われるものは、たとい未解決の問題であっても、その断り書きのもとに書き残し、他の研究者に伝えるべきである。その一例は今西錦司のアイデンティフィケーション理論であり、とても解決されたものとはいえないが、やはり大きな問題を投げかけている。こうして社会学の研究は、他の個別科学とは異なっている。対象の全体的な叙述的把握を根幹とするのは、対象の複雑な有機性の素直な反映であり、容易に換えがたいきわめて基本的な特質と考えるべきである。

さいごにすでに述べたとおり、社会の理解は、一方において長期、短期の歴史的理解であるとともに、そのなかでの動きやすさ、動きにくさの諸階程が、有機的力動的にからまりあう機序を理解することでもある。このため神経生理的な機序などが参考になるほかに、これまで日本になかった behavior genetics の開発に、非常に大きな期待がよせられる。種間および個体間変異の研究は、おそらく社会学にとって、カルチュア論においてはもちろん、他のすべての面で多くの教えをもたらさであらう。

以上今回はとくに基本的な論議に終始し、霊長類社会学の具体的な記述やそれについての論考は行わなかった。

文 献

- Davis, D. E. (1942): The phylogeny of social nesting habits in the *Crotophaginae*. *Quart. Rev. Biol.* 17: 115-34.
- 今西錦司 (1941): 生物の世界。創元社、東京。〔再刊。講談社、東京。(1972)〕
- 今西錦司 (1957): ニホンザル研究の現状と課題、とくにアイデンティフィケーションの問題について。 *Primates* 1 (1): 1-29.
- 今西錦司 (1960): トリ、サル、人間、アイデンティフィケーションを支える一般理論が可能だろうか。 *人文学報*. 12: 1-24.
- 岩田久二雄 (1972): 本能の進化—蜂の比較習性学的研究。真野書店、大阪。
- 川村俊蔵 (1969): 霊長類社会の進化への一試論。 *自然*. 24 (6): 20-27.
- 坂上昭一 (1970): ミツバチのたどったみち。進化の比較社会学。思索社、東京。
- Wheeler, W. M. (1923): *Social life among insects*. Harcourt Crace, New York. 〔渋谷寿雄(訳) 昆虫の社会生活。創元社、東京。(1941)〕